

おへん

第一章 「王国」 大阪は漫才界のブラジル

- Q 1 M-1は「しゃべくり漫才」が強いという印象があります
- Q 2 中川家が初代王者になったことの意義はどう考えていますか？
- Q 3 第一回大会では同年代のキングコングが決勝進出を果たしました
- Q 4 よく「練習しないほうがウケる」と言いますよね？
- Q 5 やはり『紳竜の研究』は観ましたか？
- Q 6 第二回大会の王者、ますだおかだもしゃべくり漫才でしたね
- Q 7 「日常会話＝漫才」は関西ならではの発想のような気がします
- Q 8 ツッコミは関西におけるマナーなのでしょうね
- Q 9 おぎやはぎが受けいれられなかった理由は何なのでしょう
- Q 10 コント漫才は、不利ですか？
- Q 11 審査するとき、「ウケ量」はどこまで評価しますか？

Q 12 埜さんの中での審査基準を教えてください

Q 13 ウケ量は「数」と「大きさ」、どちらがより重要ですか？

第二章 「技術」 M-1は一〇〇メートル走

Q 14 『宮崎駿』のボケは三七個だとのことですが数えたのですか？

Q 15 スリムクラブの漫才は「M-1史上、最大の革命」と言っているのでは

Q 16 「M-1は一〇〇メートル走」の持論は、非常にわかりやすいですね

Q 17 自虐ネタは、あまり好きではないようですが

Q 18 ダウンタウンはフリートークを発明したというのは誤解ですよ

Q 19 ギャロップも自虐ネタで上沼さんにこき下ろされていましたが

Q 20 ミキも自虐ネタでしたが上沼さんは絶賛していました。なぜですか？

Q 21 ナイツはネタにスツと入ることが多い。あれはカッコいいですね

Q 22 野球でいちばん大事なものは一回表。それは漫才でも同じなんですね

Q 23 漫才で人間味を出すという言い方をしますが、どう出せばいいのですか

Q 24 究極のボケは「存在」ということですね？

Q 25 漫才は「三角形が理想」とよくおっしゃっていますよね

Q 26 ○三年王者のフットボールアワーは、コント漫才orしゃべくり漫才？

Q 27 かまいたちの評価がやや低いように感じるのですが、なぜですか？

第三章 「自分」 ヤホー漫才誕生秘話

Q 28 芸人になりたかったというより、なるしかなかったように見受けられます

Q 29 幼少期の粗相の記憶は“dead or alive”ですよ

Q 30 笑いに目覚めたとき、松本人志を知ったんですね

Q 31 若い頃は、どんなネタをやっていたのですか

Q 32 初めて本気でネタを作り始めたわけですね

Q 33 「量より質」と言いますが、量をこなさなければ質は上がってこない

Q 34 好きなことを夢中になって語っている人はそれだけでチャーミングですもんね

Q 35 ヤホー漫才誕生前夜。聞いてるだけで、ワクワクします

Q 36 二〇〇七年、ようやく武器を携えました

Q 37 初めての決勝の舞台は、いかがでしたか？

Q 38 M-1の怖さ、漫才の怖さが伝わってきます

Q 39 線路の継ぎ目のように、ネタもあそびの部分が必要なんでしょうね

Q 40 吉本芸人の王者が多いのは、ある意味、当たり前ですよ

Q 41 ナイツは「お笑いで天下を取る」みたいなイメージとは少し違いますね

Q 42 M-1は、漫才という競技の中のM-1という種目の大会なんです

Q 43 二〇分以上のネタをやらせたら、ナイツは日本一です

第四章

「逆襲」 不可能を可能にした非関西系のアンタ、サント、パンク

Q 44 非関西弁で初めての王者は〇四年のアンタツチャブルでした

Q 45 「べらんめえ調」なら関西弁に対抗できるかもしれませんね

Q 46 関東の日常言葉は感情を乗せにくい。漫才に不向きなのは

Q 47 関東の言葉で好きな人に告白するのは本当に難しいですよ

- Q 48 「絶対漫才感」という言葉をよく使いますよね
- Q 49 海砂利水魚がM-1に出ていたら……
- Q 50 爆笑問題がM-1に出ていたら……
- Q 51 改めて、コントと漫才の違いは何でしょう
- Q 52 ハライチは、どう思われますか？
- Q 53 非関西系のM-1王者はすべてコント漫才。なぜですか？
- Q 54 サンドウィッチマンの優勝は本当に劇的でした
- Q 55 ナイツとサンドウィッチマンのネタは似てますよね
- Q 56 パンクVの〇九年は、笑い飯が史上初の満点を出した大会でもありました
- Q 57 笑い飯の「チンポジ」事件、どうとらえました？
- Q 58 下ネタもそうですが毒も扱いが難しいですよ
- Q 59 パンクブーブーのネタは水準が高いですよ
- Q 60 後輩の三四郎は「ブレイクしているのに売れない芸人」なんですか？
- Q 61 芸人はネタ、ネタ、ネタ、ネタですよ

第五章 「挑戦」 吉本流への道場破り

- Q 62 M-1の遺伝子は、やはり「新しいもの至上主義」ですよ
- Q 63 ナイツも初出場以降、M-1の洗礼を受けました
- Q 64 松本さんが「おもしろい」と認めたら支持せざるを得ないのでは？
- Q 65 ただ、チュートリアルは本当におもしろかったですね
- Q 66 日本漫才史上、イケメンであれだけウケたのは徳井さんぐらいでは？
- Q 67 イケメンが積極的にお笑いの道を選ぶのは関西独特の文化では？
- Q 68 第一期と第二期で変わったこととは？
- Q 69 ジャルジャル『びんぼんばん』はどう評価しましたか？
- Q 70 二〇一八年はM-1が本来の姿に回帰したように見えました
- Q 71 ナイツもストイックに進化を自らに課してきましたよね
- Q 72 M-1復活元年、出場するか否か、相当迷いました？
- Q 73 敗者復活戦は、ナイツは不利ですよ
- Q 74 『吉幾三』は一世一代の大ボケでした

第六章

「革命」 南キャンは子守唄、オードリーはジャズ

Q 75 ハライチ岩井さんの「M-1は古典落語の大会」というのはわかる気がします

Q 76 関東芸人にとってM-1は、いわば道場破りのようなものですよ

Q 77 『R-1』は異種格闘技戦のような様相を呈しています

Q 78 M-1は競技漫才だという批判に対しては、どう思いますか？

Q 79 マヂカルラブリーのネタは漫才ですか？

Q 80 トム・ブラウンのネタは漫才ですか？

Q 81 偉大な革命児として南海キャンディーズを語らないわけにはいきません

Q 82 山ちゃんのツッコミは優しいんですよ

Q 83 山ちゃん、天才ですよ

Q 84 人が作ったネタを言わされる相方にも苦勞はありますよね

Q 85 世紀の発明家オードリーも語らないわけにはいきません

Q 86 噛んでもアドリブで大爆笑は「名演」でした

Q 87 ただ、南キャンも、オードリーも、二本目は衝撃度が薄れてしまいました

Q 88 オードリーは引き際が見事でした

Q 89 今の時代は「ツッコミが華」と言われます

Q 90 「江戸漫才」と呼ばれる日が、来るでしょうか

エピソード「二〇年ぶりの聖地。俺ならいいよな」

プロローグ「僕が霜降り明星を選んだワケ」

えぐいくらい、悩みました。霜降り明星か、和牛か。

二〇一八年一月二日、僕は『M-1グランプリ』決勝の審査員席に座っていました。最終決戦は、霜降り明星、和牛、ジャルジャル三組の争いとなりました。

審査員は全七名です。席には、三組のボタンが用意されていました。三組のネタが終わってから数分間に、どれを押すか決めなければなりません。

最初は、膨大な情報を一気に処理しようとしたせいか、頭がフリーズしかけました。でも、脳が再びスムーズに動き始めたときは、あんなに悩んだことが嘘うそのように、すんなりと答えが出ていました。霜降り明星だな、と。

結果的には、霜降り明星四票、和牛三票で、霜降り明星が史上最年少で王者となりました。ボケのせいや君が二六歳、ツッコミの粗品君が二五歳でした。

霜降りに入れた四人のうち、誰かが和牛に投票していたら、歴史は変わっていました。

二組の今後の人生も変わっていたことでしょう。

でも今も、まったく後悔はしていません。やはり二〇一八年は、霜降り明星がM-1王者にもっともふさわしかったと思います。

なぜ、霜降りを選んだのか。発想力で言えばジャルジャル、うまさで言えば和牛のほうが格段に上です。でも、霜降り明星には、上手い下手だけでは語れない、芸人としての強さがありました。

強さ——。

非常に曖昧な表現で恐縮なのですが、芸人を見ると、そうとしか表現しようのない何かを感じることがあります。

なぜ、僕がここにこだわるかというと、僕にないものだからです。欲しくて仕方なかったけど、最近、わかりました。未来永劫えいじょう、僕には手に入れることはできない。でも、だから、より敏感に感じ取ってしまうのかもしれない。

大学を卒業し、僕は二〇〇一年、大学の一年後輩の土屋伸之のぶゆきとナイツを結成しました。

それから約二〇年が経ちました。二〇周年を記念して、本を出そうと思ったわけではありません。たまたまです。

僕は、ただ、吐き出したいだけなのだと思います。この二〇年、いや、小学四年生のとき、幼稚園でウンコを漏らした話をタネに『ウンコの歌』を作って「お笑いデビュー」してからというもの（このことは改めてどこかで触れます）、目が覚めている間中、考え続けてきたことを。何を考え続けてきたか。

どうしたらウケるか。

この一点です。僕はそこだけに生きる意味を見出し、そのお陰で、日本人に生まれた以上、平等に訪れるだろういくつかの人生の山を乗り越えることができました。

ただ、自分では、それが才能だという自覚はありません。どちらかというと、一種の病なのだと思います。「笑い脳」という。脳に酸素を送り込むために、どうしたら人を笑わせることができるかを常に考えていなければならない。他の芸人を見ていると、ときどき感じるがあります。この人も「笑い脳」にかかっているんだな、と。

そんな病気持ちゆえ、ここ数年、脳が完全に容量オーバーになってしまいました。もう

限界なのです。ある程度、アウトプットしないと、新しいデータを入れるスペースがない。話は変わりますが、二〇一八年八月から九月にかけ、集英社新書プラスというWEB媒体で三回にわたって『関東芸人はなぜM-1で勝てないのか?』というインタビュー記事を掲載してもらいました。これが思いの外、はねたそうです。

僕もいろんな人に「あれはおもしろかった」とお褒めの言葉をいただきました。中には、あの記事を読んで、「おまえも、けっこう考えてんだな」と言われたこともありました。失礼な。「けっこう」どころか、それしか考えてこなかったのです。

記事が好評だったことで、このような本の依頼が舞い込みました。「ちよūdいいや」と思いました。吐き出すいい機会だ、と。

笑いは語るものではないと言う芸人もいますが、そう言っている時点でもう語っていませんから。僕はむしろ、この場を借りて、大いに語ろうと思います。

基本的には、好評だった『関東芸人はなぜ……』を深掘りした内容にしようと思っ
ます。

M-1が始まったのは二〇〇一年です。僕らがナイツを結成して間もないときでした。

当時はまだ、『R-1ぐらんぷり』（二〇〇二年）や『キングオブコント』（二〇〇八年）などのコンテストもなかったし、『エンタの神様』（二〇〇三～一〇年）や『爆笑レッドカーペット』（二〇〇七～一〇年）のようなネタ番組もありませんでした。若手芸人が目立っている舞台がM-1しかなかったのです。

だから、むっちゃテンションが上がりました。全員がよいドンで勝負できる舞台ができたのだ、と。

第一回大会のときは、僕も含めて、参加者のほとんどが自分たちがどのくらいおもしろいかわかっていませんでした。でも、自信だけはあった。全員がすぐにでも決勝に行くつもりでいたと思うんです。

ただ、全国の若手芸人がこの大会に殺到したので、最初からレベルが高かったし、そのレベルも年々、上がっていきました。

第一回大会は一六〇三組が出場しました。以降、回を重ねるごとに参加者が増加してきました。第四回大会で二六一七組と一気に二〇〇〇の大会を突破し、翌年の第五回は三三八組、その翌々年の第七回は四二二九組。ここで初めて夏の高校野球の地方大会参加

校数を超えました。第一〇回大会の四八三五組がピークでした。以降は三〇〇〇組台に落ちたこともありましたが、ここ二年はまた四〇〇〇組を超えています。

ナイツは第一回大会からエントリーしていますが、二、三回も出場すると、勝ち進み具合で、俺らは今、八〇〇位くらいだなとか、いや、一〇〇〇位くらいだなということが肌感覚でわかってきます。地方大会の二、三回戦で負けるレベルです。

ウケているコンビを見て、自分たちはまだまだこのレベルにはいつてないなとつくづく実感しました。

僕らは決勝に進むまで結局、八年かかりました。

でも、M-1に出続けたことで自分たちの実力もわかったし、「浅草の星」というキャッチフレーズも生まれました。

極端な話、M-1がなかったら芸人を辞めていたかもしれません。M-1のお陰で、モチベーションを維持できたし、新しいネタも作ることができました。そういう意味でも、僕の芸人人生の前半は、M-1とともにあったと言っても過言ではありません。

でも、そう言えるのは、二〇一〇年までです。M-1ファンならご存じのように、M-

1は第一〇回大会を迎えた二〇一〇年、その歴史にいったん幕を下ろしました。そして四年のブランクを経て、二〇一五年に復活しました。

この本でM-1を語るとき、第一期（二〇〇一〜一〇年）と第二期（二〇一五年〜）に分けたいと思います。というのも、第一期と第二期は、僕の中では、別の大会だからです。

最大の違いは第一期の出場資格が結成一〇年以内だったのに対し、第二期は出場資格が結成一五年以内に変更になったことです。

おもしろい話していきませんが、それによって大会の性格が変わってしまった部分があります。

僕らのM-1での戦績をざっとお話ししておきます。

〈第一期〉

〇一年 ……二回戦

〇二〜〇六年 ……二回戦

〇七年 ……準決勝

〇八〜一〇年……決勝

〈第二期〉

一五年 ……準決勝

決勝に初出場した〇八年は、唯一、最終決戦まで残りました。

M-1決勝は、第一ラウンドでまず全グループが漫才を披露します。各審査員の合計点が、そのグループの得点となります。そして、上位三組が最終決戦に進み、もう一本、ネタを見せません。最後は、審査員得票がもつとも多かったグループが優勝します。

ただし、その〇八年の最終決戦では、全七票中一票も入らずに三位でした。

M-1は僕にとってトラウマ以外の何物でもありません。M-1決勝で計四本、ネタを披露したのですが、一度も「ウケた」という感触がなかったからです。

どうしたらウケるかだけを考え続けてきた僕にとって、これは全否定に等しい結果でした。予選ではどっかんどっかんウケていたのですが……。

いずれの大会動画も未だに観たことがありません。僕の人生における最大の恥部だけに、恥ずかしくて、怖くて観ることができないのです。

だから、ずっと、ずっと、考えてきました。どうやったらM-1の決勝でウケるのだろう、と。もう出られないのですが、今もつい考えてしまいます。それを考えることは、僕にとってどう生きるかという問題とほぼ同義なのです。

前置きが長くなりましたが、そろそろ、本編に入りたいと思います。

もう一つ、最初に言っておきたいことがあります。この本は、ぶっちゃけ、言い訳です。ナイツがM-1で優勝していたら、何を言ってもカッコいいのですが、そうではない。おまえが偉そうに何を言っているんだという話です。

もつと言えば、負け惜しみです。青春時代、恋焦がれたM-1に振られた男が腹いせで本を書いているくらいに思っていただければ幸いです。

では、言い訳を始めます。